

「自己表出としての表現力」と「対象に伝えるための表現力」 を見取る指標づくり

土井 徹 鹿江 宏明 松本 信吾 掛 志穂
青原 栄子 大和 浩子 神山 貴弥 山元 隆春

1. はじめに

私たち中央エリアの6校園は、3年前からお互いの研究の情報の共有と、共同研究の可能性を探るために、定期的に会議を行ってきた。幼稚園、小学校、中学校という校種の違い、またそれぞれの学校園の特徴や研究関心の違いなどから、共通のテーマを紡ぎだすことは容易ではなかったが、その中でそれぞれの学校園が共通して関心を寄せていたのが、表現力・コミュニケーション力であった。

そこには、現代社会の要請として、国際化・情報化社会に対応できる表現・コミュニケーション能力の育成が求められているという共通認識があり、またそれぞれの学校園の課題として、表現が苦手な子どもの増加やコミュニケーションが不十分である、などの実態把握があった。また、表現力・コミュニケーションの内容は、学校種や地域を超えて普遍的に大切なものであり、その発達は連続しているものであることを確認した。

新たに改定された学習指導要領においても、多くの教科で「表現力」育成について言及されており、学校種を問わず「言語活動の充実」が盛り込まれ、その連続性が求められている。以上、現在の子どもの姿と社会の様相から、多次的価値の受容と発信をする能力、人間関係形成能力の育成は急務であると考えた。

このような背景および関心から、私たちは本年度より、表現力・コミュニケーション力に焦点を当てた研究を立ち上げることにした。

2. 研究の目的・方法

(1) 目的

本研究は、数量化して比較・検討することが難しい、いわゆる見えにくい学力といわれる表現力を、簡便にかつ妥当な評価方法を提案する試みである。

研究初年度の今年度は、表現力を育成するための指標について検討することを目的として情報収集を行い、表現力の指標を作成する。次年度以降に、指標に基づいて「言語的表現力」と「非言語的表現力」についてパフォーマンス課題とルーブリックを作成する。これらを用いて評価を行い、得られた結果から表現力育成の方法論を確立するための基礎的知見を得ることが本研究の目的である。

(2) 方法

研究方法の概略は次のとおりである。

まず、幼稚園・小学校・中学校の各段階において、つけておきたい表現力について、「言語」と「非言語」の両面から、「相手にかかわらず表現・伝達する際にできていてほしいこと」(自己表出としての表現力)「相手を意識して表現・伝達するという点でできていてほしいこと」「双方向のやりとりにつなげるといってほしいこと」(対象に伝えるための表現力)について抽出し、系統的に整理する。その後、整理した内容の妥当性について検討し「表現力」の指標を作成する。

具体的な研究方法を以下に示す。

①「表現力」についての意見交換

「表現力」をどうとらえるかについて筆者らで意見交換を行った。表現力には、言語に関するものと非言語に関するもの、また、表出するものもある。今回は表出するものも含めて「言語」「非言語」の観点で表現力を抽出することにした。

②幼稚園、小学校、中学校の教員に対して、「表現力」に関する調査を行う

子どもの表現力に関して「こんなことができてほしい」ということについて、附属幼稚園、附属三原幼稚園、附属三原小学校、附属東雲小学校、附

Toru Doi, Hiroaki Kanoe, Shingo Matsumoto, Shiho Kake, Eiko Aohara, Hiroko Yamato, Takaya Kohyama, Takaharu Yamamoto: Production of an index which perceives “the power of expression as self-expression”, and “the power of expression for telling an object”

属三原中学校，附属東雲中学校の教員に回答を求めた。「言語」「非言語」の観点で「相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと」「相手を意識して表現・伝達する」という点でできてほしいこと」「双方向のやりとりにつなげる」という点でできてほしいこと」について，思いつく限りのことを付箋に書くよう求め，それを収集する方法をとった。「できてほしいこと」の基準となる時期は，幼稚園では「幼稚園卒園時」小学校では「小学校低学年修了時・中学年修了時・高学年修了時」中学校では「中学校卒業時」とした。あわせて「大人になってできてほしいこと」についても回答を求めた。

③調査結果を整理する

調査結果は，幼稚園，小学校，中学校，大人の発達段階を考慮して，「言語」「非言語」にわけて整理し，観点別に次のように分類した。

「言語としての表現力」について，「双方向のやりとりにつなげる」という点でできてほしいこと」の中では，「挨拶」「聴く」「思考」に分類した。「相手を意識して表現・伝達する」という点でできてほしいこと」の中では，「要求の伝え方」「敬語」が，

そして「相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと」の中では，「話し方」「ボキャブラリー」に分類した。「非言語としての表現力」については，「表現するときの様子」「何かを媒介としたときの表現」に分類した。整理・分類した結果から，32項目を「表現力」の指標として設定した。

④指標について，発達段階を考慮して表を作成する

③と並行して，32個の指標はどの成長段階でいえることかという「それぞれの指標の該当する期間」も考えていった。その後，それぞれの指標と期間をあらわした表を作成した。

⑤指標の妥当性を問うチェックリストを集約する

32の指標を示した表とその期間が適切かについて，附属幼稚園，附属三原幼稚園，附属三原小学校，附属東雲小学校，附属三原中学校，附属東雲中学校の教員に回答を求めた。記入の仕方は，指標の1項目ごとに適切だと思われる期間（幼稚園，小学校低学年・中学年・高学年，中学校）に○をつけていくという方法である。各項目について，集約した結果から○の数が多いところが妥当な期間と考え，表にまとめた。

表1 言語的表現の発達段階に関する表

	幼稚園	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校
双方向のやりとりにつなげるという点でできてほしいこと	1自分から挨拶をすることができる		----->		
	2「ありがとう」「ごめんなさい」が言える		----->		
相手を意識して表現・伝達するという点でできてほしいこと	3返事をして会話することができる		4聴いたことをもとに話すことができる		8意見を集約し論点を明確にして話すことができる
	5自分の考えを素直に言葉で伝えることができる		6自分の考えを整理して言葉で伝えることができる		
相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと	9自分の要求を言葉にすることができる		10聞く側のことを考えてわかりやすい話し方をすることができる		11感情をコントロールしながら相手に応じた伝え方をすることができる
	12相手に応じていねいな言葉をつかうことができる		13敬語をつかって話すことができる		
相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと	15大きい声ではっきりと言うことができる		16大きい声ではっきり，ゆっくり，いねいに言うことができる		17大きい声ではっきり，ゆっくり，いねいに，感情をのせて言うことができる
	18生活の中で必要な言葉を知り，つかうことができる		19 1つの伝えたいことについて2つ以上の言い方で表現することができる		

表2 非言語的表現の発達段階に関する表

	幼稚園	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校
双方向のやりとりにつなげるという点でできてほしいこと	20相手とやりとりしながら表現している			21相手のリアクションによって，表現の仕方を変えることができる	
相手を意識して表現・伝達するという点でできてほしいこと	22目や相手の方を見たり，うなずくなどの反応を返すことができる				
相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと	24心の動きを表情で表すことができる		25時と場に応じて心の動きを表情で表すことができる		
	26恥ずかしがらずに表現できる				
			27落ち着いて表現できる		28堂々と表現できる
	29伝えたいことを音楽・図などで表現できる		30自分の思いや考えを色，形，感じなどを考えながら素直に視覚化できる		
相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと				31目的に応じてグラフ，図，写真，表を選択することができる	
				32PCのプレゼンテーションソフトを使いこなすことができる	

3. 結 果

子どもの表現力に関して「こんなことができているほしい」ということについて、附属幼稚園、附属三原幼稚園、附属三原小学校、附属東雲小学校、附属三原中学校、附属東雲中学校の教員に回答を求めた。年齢(学年)段階別に整理したものを表1, 2に示す。

表1, 2の妥当性に関するアンケート調査の結果を

表3, 4に示す。調査対象は、附属幼稚園(8名)、附属三原幼稚園(7名)、附属三原小学校(13名)、附属東雲小学校(21名)、附属三原中学校(14名)、附属東雲中学校の教員(14名)、合計77名である。

表3, 4に示した数字は、当該項目について、できるようになっておくことが妥当であると判断した教員の数を示している。

表3 言語的表現の発達段階に関する表についてのアンケート調査の結果 (n=77)

	幼稚園	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校	
双方向のやりとりにつながるといってできていて欲しいこと	自分から挨拶することができる	67	76	76	74	74
	「ありがとう」「ごめんなさい」が言える	73	77	75	76	74
	返事をして会話することができる	73	69	15	10	9
	聞いたことをもとに話すことができる	2	12	74	73	10
	自分の考えを素直に言葉で伝えることができる	66	76	7	5	5
	自分の考えを整理して言葉で伝えることができる	0	2	73	11	7
		0	1	3	74	11
		0	0	1	6	74
		0	0	1	6	74
		0	0	1	6	74
相手を意識して表現・伝達するという点でできていて欲しいこと	自分の要求を言葉にすることができる	76	65	7	7	7
	自分の要求を相手にわかるようにつたえることができる	0	13	75	69	7
	相手に応じて丁寧な言葉を遣うことができる	52	65	10	7	7
	敬語を使って話すことができる	0	6	65	69	7
		1	0	1	9	70
		1	0	1	9	70
相手にかかわらず表現・伝達する際にできていて欲しいこと	大きい声ではっきりと言うことができる	73	68	7	7	7
	大きい声ではっきり、ゆっくり、ていねいに言うことができる	1	12	73	67	8
		1	1	2	13	70
	生活の中で必要な言葉を遣うことができる	72	76	12	7	7
	1つの伝えたいことについて2つ以上の言い方で表現することができる	0	1	5	69	73

表4 非言語的表現の発達段階に関する表についてのアンケート調査の結果 (n=77)

	幼稚園	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校
双方向のやりとりにつながるという点でできていて欲しいこと	相手とやりとりしながら表現している →				
	72	74	71	8	8
相手を意識して表現・伝達するという点でできていて欲しいこと	目や相手の方を見たり、うなづくなどの反応を返すことができる →				
	70	75	75	71	69
相手にかわからず表現・伝達する際にできていて欲しいこと	心の動きを表情で表すことができる →				
	73	75	11	7	6
	時と場に応じて心の動きを表情で表すことができる →				
	0	1	54	71	72
	恥ずかしがらずに表現できる →				
	72	76	71	7	6
	落ち着いて表現できる →				
	1	2	10	68	7
	堂々と表現できる →				
	1	2	3	18	72
伝えたいことを音楽・図などで表現できる →					
62	64	72	75	74	
自分の思いや考えを色、形、感じなどを考えながら素直に視覚化できる →					
63	69	74	76	74	
目的に応じてグラフ、図、写真、表を選択することができる →					
0	0	7	74	75	
PCのプレゼンテーションソフトを使いこなすことができる →					
0	0	0	4	69	

言語に関する表の結果を見ると、「自分から挨拶することができる」や「自分の考えを素直に言葉で伝えることができる」のは幼稚園段階からではなく、小学校低学年からが妥当であるとする教員が10名、11名いるなど、筆者らが想定した発達段階が高いと判断された項目が複数見られる。一方で、「自分の要求を相手にわかるように伝えることができる」については、小学校低学年から可能であると判断した教員が13名見られるなど、筆者らが想定した発達段階が低いと判断された項目も複数見られる。非言語に関する表においても同様の傾向が見られる。次に、表1、2に対する回答者からの疑問や意見を示す。

- ・「自分が言いたいことは言うが、相手の考えを十分受け入れることができない」児童の実態がある。双方向のやりとりをするためには「聞く」ことを重視しなければいけないのではないか。
- ・「思い」と「考え」の間には発達段階の差があるように思われる。並列してよいのかどうか疑問である。
- ・「相手にかわからず表現・伝達する際にできていて

欲しいこと」の項目がある意味がわからない。表現は相手があってこそあるものであり、相手を意識しない表現はないのではないか。

- ・言語と非言語という分類で本当にいいのだろうか。
- ・スキルの部分と内面的部分が混在している。整理できないか。
- ・各発達段階と表現・コミュニケーションの発達段階は一致するのか。
- ・幼小1・小234・小56中1・中23の4段階の方が妥当ではないか。
- ・全体的に少しレベルが高いように思う。
- ・「PCのプレゼンテーションソフトを使いこなすことができる」のは中学校のレベルでもむずかしいのではないか。
- ・「大きい声ではっきり言うことができる」は「場に応じた声ではっきり言うことができる」ではないか。大きい声では不適切な場もある。
- ・グラフやプレゼンテーションソフトなどは、言語を使って表現する際のあくまで補助的な手段ではない

か。非言語に分類されるものではないのではないか。
・「自分の思いや考えを色、形、感じなどを考えながら素直に視覚化できる」は、「自分の思いや考えを絵、音、動きなどを考えながら素直に視覚化できる」とする方がよい。

アンケート調査の結果から、項目および発達段階について、再検討・修正が必要であると考えられる。

4. おわりに

本研究は、幼稚園・小学校・中学校の12年間で、子どもたちに身につけてもらいたいと考える表現力の観点を明らかにしようとする試みであった。その結果として、幼稚園から中学校までを5つの年齢段階に区切った上で、表1と表2に示すような表現力に関わる評価観点を提示するに至った。しかし、前述したようにこの妥当性を確認するために実施したアンケート調査の結果においても指摘されるように、本研究で提示した評価観点については、再検討・修正の必要があると考えられる。以下では、アンケート調査結果で指摘されたこと以外に改めて研究を振り返った上で、今後に向けての改善点を示す。

第1の改善点は、表現力についてのとらえに関することである。この研究の当初は、題目にも示されるように、「自己表出としての表現力」と「対象に伝えるための表現力」の2つを想定していた。前者は、自分が感じたり考えたりした心象を外部の世界に独自の方法で表現する力で、感性に訴える表現力と換言できるものである。一方、後者は、自分が見聞きしたこと、考えたことを正確あるいは効果的に伝達する力で、論理性に訴える表現力と換言できるものである。しかし、表現力として具体的な項目を考える段では、大観点として、「言語的表現力」と「非言語的表現力」を、さらに中観点として、「相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと」、「相手を意識して表現・伝達するという点でできてほしいこと」、「双方向のやりとりにつなげるという点でできてほしいこと」を掲げたために、当初に想定した2つの表現力を見取るための項目であるという意識が薄れてしまった（具体的な項目を考える上では何らかの足がかりがあるので、ここで利用した大観点や中観点が間違ったものであったとは考えていないが、掲げた観点到固執してしまい当初に想定した表現力を抽出しようとする視点を見失っていた感がある）。また、結果の整理の段でも、当初想定した2つの表現力が生かされてないので、それに基づき改めて結果を整理してみる

必要がある。その上で、アンケート調査結果における指摘も踏まえ、評価する項目の再検討・修正をすることになるであろうが、「対象に伝えるための表現力」に比して「自己表出としての表現力」を評価する項目の内容が乏しいと思われるので、次年度の研究では、まずその点を補完していく必要があるであろう。

第2は、アンケート調査の方法論に関することである。アンケート調査の結果、表3と表4に示されるように、身につけてもらいたい時期については、概ねどの項目についても著者らが想定した時期が妥当であるという結果になった。しかし、今回は、時間的な制約もあったので調査対象者である教員にできるだけ負担が少なくなるようにあらかじめ著者らが想定した時期を示した上で、それぞれの時期が妥当かどうかを判断してもらった。そのことが結果に反映していることは十分に考えられるので、次年度に評価する項目を再検討し身につけてもらいたい時期を改めて問う際には、それぞれの回答者の独自の考え方が反映されるようにする必要がある。

最後になるが、本研究では、研究初年度ということもあり、必ずしも十分な表現力に関わる評価観点を提示できたとは言えないが、幼稚園・小学校・中学校の12年間を見通した表現力のあり方を考えるために、各園校の教員が集まって、あるべき表現力について議論することができた。その中で、各園校で育てようとする表現力が何であり、各園校の段階で教員がどのレベルまでそうした表現力が身につくことを期待しているのかが少しずつ明らかとなってきた。こうした本年度の成果と課題を踏まえて、次年度以降、表現力を評価するためのパフォーマンス課題やルーブリックの作成につなげていきたい。

参考文献

- 1) 深田博己。「インターパーソナルコミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学—」。北大路書房。1998。
- 2) 佐伯胖「『学び』を問いつづけて」。小学館。2003。
- 3) 佐藤学「学びの対話的実践へ」。佐伯胖・藤田英典・佐藤学編「学びへの誘い」。東京大学出版会。1995。
- 4) 上田邦夫ほか「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造(6)」。広島大学附属東雲中学校研究紀要。第37集。2005。